

◇◇◇◇◇◇ 議員のひとりごと ◇◇◇◇◇◇

「実るほどコウベを垂れる稲穂かな、っていうではないか」

これは鼻っ柱の強かった昔、職場の上司から戒められた一言。

今回の国政選挙の結果をどう捉えたらいいか、その原因はどこにあるのか？当初、小池都知事の一挙手一投足を中心に揺れ動いていたかにみえた。それが彼女の率いる希望の党と民進党との合流の際に同党の一定の議員の排除発言に端を発し、一気に流れが変わってしまった、とマスコミ等に報じられてきた。真偽のほどはわからないが、選挙結果からするとそうかもしれないし、都知事自身、反省の弁を述べていたからその可能性は大きい。

私は彼女自身はこれまでと何ら変わってなかったのではないかと想像する。以前と同様に自分の考え、自分のスタイルを貫いてやってきた、と思っている。それがどうして今回はバッシングを受け逆風にさらされてしまったのか？思うに彼女は現在の自分の立ち位置を理解してなかったことはないだろうか？要するに同じ発言、同じ行動をとろうとも置かれている立場によって相手方や周囲の人たちの受ける印象、意味合いは異なってくる。都議選前の彼女は孤立無援状態で強気の発言は健気な一所懸命さの表われ、自己の意思を通そうとする純粹さ、と受け取られていなかったか？彼女自身どこまで意識していたか不明だが、世間的には同情の目をもって見られ声援する気持ちかはたらいていたように思える。

それが都議選によって都民ファーストの会の大躍進、公明党と組んでの都議会における安定多数を得て目的は達成されたものの、このような環境の変化が彼女に対するイメージにどのような影響を及ぼしたか、あまり頓着しなかったのではないかと。要するに弱い権力基盤のときと盤石な体制になったときとでは、同じ発言でも相手の受け止め方や印象は違ってくる。以前であれば排除発言は乾坤一擲の政治生命をかけた大勝負と捉えられたかもしれないが、現状では鼻持ちならない傲慢な権力者と映らなかつたらうか？

一般有権者の気持ちは推測の域を出ないが、私たち議員としては等閑視しているわけにはいかない。特に他人は不快に思うだろう本音は中々、当人には言ってくれないものである。そこのところを勘違いせず、常に厳しく我が身を振り返る習性を身に付けなくてはいけない。やっぱり選挙は恐いのだ。

(白 雲)